

飯島賢二の『恐縮ですが』…一言コラム』

第72回 日本人の心のふるさと 『忠臣蔵』

元禄15年(1702年)12月14日(15日未明)赤穂の浪士47名が江戸本所の吉良邸に討ち入り…、12月になるとご存知「忠臣蔵」である。小生実は、この「忠臣蔵」オタクで、目玉の松ちゃん(尾上松之助)、バンツマ(坂東妻三郎)以来、大河内伝次郎、千恵蔵、歌右衛門、長谷川一夫と、40数種類のビデオを持っているのが、密かな自慢となっている。

この話の元は、^{あさのたくみのかみながのり}浅野内匠頭長矩が元禄14年3月14日に江戸城・松の廊下において、高家筆頭、^{きらこうすけのすけよしひさ}吉良上野介義央に斬りつけた、刃傷事件を発端とした史実である。

吉良邸討ち入り当時も、江戸市中は大変なパニックになったほどだが、その後寛延元年(1748年)に大坂(当時)竹本座で、この史実を題材とした「仮名手本忠臣蔵」(二世竹田出雲、他合作)と言う人形浄瑠璃芝居が初演され、大評判となった。以後、歌舞伎芝居としても人気を呼び、現在に至るまで国民的文化財と言うべき存在になっている。

江戸時代以来、落首・落書に始まり、川柳、狂歌、講談、落語、小説などの文芸や芸能、双六を始めとする子供のおもちゃにまで「忠臣蔵」を題材とするものが多数生まれている。近代以後も、映画、演劇を始め、テレビドラマ、更にはバレエやオペラなど、あらゆるジャンルで「忠臣蔵」は取り上げられている。

理屈なしで、忠臣蔵を見て、あるいは読んで頂ければ分かることだが、この話の中には、日本人が忘れかけている「心の原典」がある。

突然の、しかも理不尽な不幸に耐え忍ぶ赤穂藩士達の無念さ、犬公方・綱吉体制の横暴な専制君主、原則無視、賄賂横行の腐敗政治への抗議心、その弱い大衆の心を代弁するかの義士達の活躍は、さぞかし喝采であっただろう。目的を達するまでの忍従の日々、離れて行く脱藩者への慈愛の心、「忠」と「孝」の板ばさみ、自らは律し、周りには差別ない慈悲を^{ほどこ}施す^{くらのすけ}内蔵助、暗に託する武士の情け、^{あうのう}懊惱するほのかな恋心、義侠の商人魂、「大義を通す」を^{いさぎよ}潔しとする無骨な生き方、しかしそのベースには緻密な計画がある…

人と人が絡み合い生じる多様なドラマ的要素が、無尽に盛り込まれている。このことは我国のみの留まらず、明治にはイギリス、アメリカにも翻訳され、特にアメリカ26代大統領Sローズヴェルトにも愛読され、日本人の国民性を理解するうえで大きな影響を与えたと言われている。この物語はヨーロッパ人にとっても、中世騎士道と共通する忠誠心として、深く感銘を与えたに違いない。

ヨン様以上に、我国には素敵な人物がたくさんいる(いた?)。今まさに、昨今の世紀末的現象を打破するためにも、「義」に基づく生き方を、共有する必要があるのではないだろうか。(吉原健一郎監修『元禄忠臣蔵』実業之日本社・一部文章抜粋)